

研究報告

成人看護学実習Ⅰ（急性期）における 学生のルーブリックの活用と有用性の実態

Actual Use and Usefulness of Rubrics by Students
in Adult Nursing Clinical Practice (acute phase)

森安 朋子

MORIYASU Tomoko

趙 崇来

CHO Soongrae

利木 佐起子

RIKI Sakiko

抄 録

A 大学看護学科では、2018 年度「成人看護学実習Ⅰ（急性期）」からルーブリックを用いた実習評価指針を導入した。本研究では、今回導入した実習評価指針について、活用と有用性の実態を明らかにすることを目的として、無記名自記式質問紙調査を実施した。その結果、回答した学生の 95.5%が実習評価指針を活用していた。そのうち、実習目標の理解に繋がった学生は 90.5%で、その理由には【具体的で理解しやすい】、【目標達成方法が理解できる】、【目標達成状況が理解できる】が抽出された。中間評価の際に実習後半の課題を見出せた学生は 100%で、その理由には【客観的に自己評価できる】、【目標達成状況が理解できる】、【動機付けになる】が抽出された。客観的な評価ができた学生は 100%で、その理由として【自身を振り返ることができる】、【自身の達成状況が理解できる】、【的確に評価できる】が抽出され、実習評価指針の有用性が明らかになった。また、実習評価指針の表現や説明の時期を工夫し、より理解しやすいものに改善していく必要性が明らかになった。

キーワード ■ルーブリック 看護基礎教育 自己評価 臨地実習 実習評価

I. はじめに

A 大学看護学科で3年次後期に開講される「成人看護学実習Ⅰ（急性期）」（以下、急性期実習）は、周術期の看護を学ぶ臨地実習科目である。学生8名のグループを編成し、1クール3週間の実習を行っている。実習評価は実習評価表に基づいて行い、評価が一致するまで学生と教員間で面談を実施している。2014～2016年度の実習評価は、評価項目について、「4；ほとんど自分でできる」、「3；少しの指導・助言があれば自分でできる」、「2；指導・助言があれば自分でできる」、「1；できない」の4段階評価を行っていたが、学生の自己評価と教員評価との乖離があり、学生個々の状況に合わせた実習指導に苦慮していた。そこで、2017年度は実習目標について、4段階評価に加え実習状況と課題を記述するようにした。その結果、実習状況の振り返りは容易になったが、実習目標到達度の共通理解が困難であり、学生の自己評価と教員評価の乖離は依然として縮まらなかった。

近年、成績評価方法としてルーブリックが重要視されている。2012年に公表された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」では、学士課程教育の質的転換への好循環の確立として、学修成果の把握にルーブリックの活用が例示されている¹⁾。また、大学設置基準第25条2項には、「大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対して、その基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする」とあり、成績評価基準の必要性が示されている²⁾。ルーブリックは、学生が目標に対してどこまでできているかを示す絶対評価を行うためのツールである³⁾。学生も評価基準を事前に知ることができ、何がどこまでできているかを明確に示すため、誰が評価しても一貫性のある客観的な評価ができる。

ルーブリックに関する先行研究は数多くある。生田らは、成人クリティカル実習においてルーブリックを導入したことで、前年度よりも学生・教員間の評価点数の差が縮小したことから、学生と教員が目標を共通認識し、客観的に評価できるようになった⁴⁾と報告している。また、ルーブリックを導入した臨床実習評価表と現行の評価表とを比較した岩井らの理学療法領域の報告では、ルーブリックを用いた評価表は採点しやすいと学生から肯定的な意見が多かった⁵⁾と述べている。

看護基礎教育における実習の在り方として、学生が自ら学ぶ意思・意欲を持ち、そのための方法上の手ごたえを、すべての学修過程で得られることが不可欠である⁶⁾。実習目標は、学生に獲得させたい能力や技能を習得するために設定する。学習は本来、学習者の興味、関心のあるところから始まるもので、実習開始時には実習領域ごとに設定している目的・目標を学生と共有するが、同時に学生自身の bottom-up の目標を設定し、共有することは、実習という授業の展開において極めて重要である⁷⁾。また、実習目標を達成するには、形成的評価が重要とな

る。形成的評価は、教育活動の途中でその成果を中間的に把握し、それに基づいて指導方法や進め方に変更を加えたり、必要な補充的教育を行ったりする⁸⁾。実習教育では、形成的評価とフィードバックの繰り返しにより、学生は看護実践教育を身につけることができる。ループリックスは、簡便かつ短時間で評価することができ、形成的評価にも優れており、速やかなフィードバックは、次の課題への学習意欲をもたらすことができる⁹⁾。これらの報告を基に研究者らは2018年度急性期実習において、学生と教員が目標を共通認識し、学びの過程を振り返りながら客観的に評価できると考え、ループリックスを用いた実習評価指針（以下、実習評価指針）（資料1）を導入した。そこで、今回導入した実習評価指針に関する学生の活用や有用性の実態を調査し、効果的な活用について示唆を得たいと考える。

Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は、今回導入したループリックスを用いた実習評価指針について、学生の活用や有用性の実態を明らかにすることである。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究デザイン

実態調査研究

2. 研究対象

A 大学看護学科3年生、2018年度急性期実習を履修した63名。

3. 調査方法

本研究では無記名自記式質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、「実習中実習評価指針を活用したか、またどのように活用したか、実習評価指針を用いることで実習目標の理解に繋がったか、実習評価指針を用いることで中間時に実習後半の課題を見出せたか、実習評価指針を用いることで客観的な自己評価ができか」とした（資料2）。

4. データ収集期間

2019年3月27日～4月25日

5. データ収集方法

急性期実習終了後、学生に口頭と書面で研究依頼を行い、質問紙を配布した。質問紙の提出

をもって研究協力に同意したものとみなし、提出期限は1か月後とした。

6. データ分析方法

選択式質問内容は記述統計として処理し、自由記述の回答は内容分析を行った。データの分析は研究者3名で行い、分析内容の妥当性を確保するために、研究者間で共通理解が得られるまでディスカッションを行ってカテゴリー化した。なお、研究者には臨床経験・教育経験30年以上のもの、質的研究に精通した者が含まれている。

7. 倫理的配慮

学生に強制力がかかることを防ぐため、研究依頼の説明を自由意思で聞ける場を設け、説明は急性期実習の単位認定者以外の者が行った。また、質問紙は無記名であり研究者によって厳重に管理され、結果を公表する際は個人が特定されることはないことを説明した。さらに、研究協力は学生の自由意思に基づくため強制されるものではないこと、研究に協力しなくても不利益を被ることはなく成績に影響することはないことを強調して説明した。

本研究は、佛教大学「人を対象とする研究計画倫理審査委員会」にて承認を得て実施した（承認番号 H30-41-B）。

Ⅳ. 結 果

1. 対象

質問紙の回収は22名、回収率34.9%であった。有効回答数は22名であるが、問2以降については無回答を除く21名を分析対象とした。

2. 質問項目毎の結果

抽出されたカテゴリーは【】、サブカテゴリーは< >、記述内容は「」で示す。

1) 実習中実習評価指針を活用したか（問1）

実習中に実習評価指針を活用した学生は21名（95.5%）だった。活用しなかった学生は1名（4.5%）で、その理由は「活用することを忘れていた」と回答していた。

2) 実習評価指針を用いることで実習目標の理解に繋がったか（問2）

実習評価指針を用いることで、実習目標の理解に繋がった学生は19名（90.5%）、繋がらなかった学生は2名（9.5%）だった。実習目標の理解に繋がった理由について、【具体的で理解しやすい】、【目標達成方法が理解できる】、【目標達成状況が理解できる】の3つのカテゴリーが抽

出された。

【具体的で理解しやすい】では＜具体的な指針がある＞，＜行動レベルでの表記がある＞，＜実習前に学習内容のイメージができる＞，【目標達成方法が理解できる】では＜目標・評価方法が明確になる＞，＜次のステップに繋がられる＞，＜目標達成の道筋がわかる＞，【目標達成状況が理解できる】では＜的確な自己評価ができる＞，＜課題を明確化できる＞のサブカテゴリーが含まれた（表1）。

実習目標の理解に繋がらなかった理由は、「あまり見る事がなかった」、「関連させて考えていなかった」等であった。

表1. 実習評価指針を用いることで、実習目標の理解に繋がった理由

カテゴリー	サブカテゴリー
具体的で理解しやすい	具体的な指針がある
	行動レベルでの表記がある
	実習前に学習内容のイメージができる
目標達成方法が理解できる	目標・評価方法が明確になる
	次のステップに繋がられる
	目標達成の道筋がわかる
目標達成状況が理解できる	的確な自己評価ができる
	課題を明確化できる

3) 実習評価指針を用いることで中間時に実習後半の課題を見出せたか（問3）

実習評価の指針を用いることで、中間評価の際に実習後半の課題を見出せた学生は21名（100%）だった。その理由について、【客観的に自己評価できる】、【目標達成状況が理解できる】、【動機付けになる】の3つのカテゴリーが抽出された。

【客観的に自己評価できる】では＜数値化、可視化できわかりやすい＞，＜不足部分を自分で見つけられる＞，＜振り返りができる＞，＜後半の課題が見つけやすい＞，【目標達成状況が理解できる】では＜できていること，できていないことがわかる＞，＜できていない部分を把握できる＞，【動機付けになる】では，＜頑張ろうと思える＞，＜自信に繋がる＞，＜目標達成の方向性がわかる＞のサブカテゴリーが含まれた（表2）。

4) 実習評価指針を用いることで客観的な自己評価ができたか（問4）

実習評価指針を用いることで、客観的な評価ができた学生は21名（100%）だった。その理由について、【自身を振り返ることができる】、【自身の達成状況が理解できる】、

【的確に評価できる】の3つのカテゴリーが抽出された。

【自身を振り返ることができる】では＜できたこと、できていないことに自身で気づけた＞、＜自分の行動を振り返ることができる＞、＜目標の理解が深まる＞、＜実習中でも評価できる＞、【自身の達成状況が理解できる】では、＜できていないことがわかる＞、＜達成状況を数値化できる＞、【的確に評価できる】では＜自信を持って評価できる＞、＜共通の基準となる＞、＜自分では気づけない視点に気づけた＞、＜評価しやすい＞のサブカテゴリーが含まれた（表3）。

表2. 実習評価指針を用いることで、中間評価の際に実習後半の課題を見出せた理由

カテゴリー	サブカテゴリー
客観的に自己評価できる	数値化、可視化できわかりやすい
	不足部分を自分で見つけられる
	振り返りができる
	後半の課題が見つけやすい
目標達成状況が理解できる	できていること、できていないことがわかる
	できていない部分を把握できる
動機付けになる	頑張ろうと思える
	自信に繋がる
	目標達成の方向性がわかる

表3. 実習評価指針を用いることで、客観的な評価ができた理由

カテゴリー	サブカテゴリー
自身を振り返ることができる	できたこと、できていないことに自身で気づけた
	自分の行動を振り返ることができる
	目標の理解が深まる
	実習中でも評価できる
自身の達成状況が理解できる	できていないことがわかる
	達成状況を数値化できる
的確に評価できる	自信を持って評価できる
	共通の基準となる
	自分では気づけない視点に気づけた
	評価しやすい

5) 実習評価指針について気づいた点

「どこに自分が当てはまるのか分かりにくいものがあった」、「実習前や中にもう少し意識して使うような説明があれば、もう少し有効活用できたかもしれない」、「点数がつけにくい個所があった」という記述があった。

V. 考 察

19名(90.5%)の学生が実習評価指針を用いることで実習目標の理解に繋がったと回答した。周術期にある患者の特徴として、手術前・手術中・手術後と経過していく中で日々の状態が変化していくことが挙げられる。そのため実習目標は、手術前・手術中・手術後で患者の変化に合わせて異なっており、手術による侵襲を理解した上で患者の手術後の回復過程を予測し、術後合併症を早期発見、予防していく看護が求められる。学生は急性期実習で手術侵襲を初めて目の当たりにし、手術後の回復過程の予測に戸惑うことが多く、文章の提示だけでは実習目標が理解し難い状況があると考えられる。ループリックは評価観点と評価基準を明確に示すものであり、事前に知らせておくことで、学生はどのようなスキルや行動を身につければよいのか、身につけることを期待されているのかあらかじめ把握することができる。抽出された【具体的に理解しやすい】は、学生が実習評価指針をもとに実習目標を理解できたことを示している。また、【目標達成方法が理解できる】は、判断力や関心、意欲、技能を評価するにはどのようなパフォーマンスを行えばよいのか理解できたと考えられる。これは、森田の報告¹⁰⁾にもあるように、どのように取り組むことで目標達成に繋がるか理解しやすいというループリックによる効果と言える。

実習目標の理解に繋がらなかった学生は、実習評価指針を「あまり見ることはなかった」、「関連させて考えていなかった」と回答しており、活用する必要性の意識が低かったと考えられる。実習評価指針について気づいた点の、「実習前や中にもう少し意識して使うような説明があれば、もう少し有効活用できたかもしれない」という記述から、今後は事前オリエンテーション時だけではなく、実習中にも実習評価指針を活用する機会を意図的に設けていくなど説明の時期を工夫すること、実習目標との関連についても説明を丁寧にしていくなどの改善点も明確となった。

実習評価指針を用いることで中間評価の際に実習後半の課題を見出せたと回答した学生は21名(100%)であった。実習途中でそこまでの学習成果を把握し、後半に向けての課題を見出していく形成的評価は、評価に対する最高到達点に近づくために必須である。タイミングの良い迅速のフィードバックは、形成的評価の役割機能も果たす¹¹⁾。【客観的に自己評価できる】ことで、実習途中で【目標達成状況が理解できる】、具体的にこうすれば高い評価になるとわかり実習意欲が刺激され「頑張ろうと思える」ような【動機付けになる】に繋がったと考える。

ルーブリックは形成的評価にも優れており、実習評価指針の活用で速やかなフィードバックが行え、効果的な形成的評価が行えていたと考える。また、次の課題への学習意欲にも繋がっていたといえる。

21名(100%)の学生が、実習評価指針を用いることで客観的な評価ができたと回答した。ルーブリックでは誰が評価しても一貫性のある客観的な評価ができることが期待されるが、実際に学生は今まで気づかなかった自己の強みや弱みを知り、思考パターンや行動の傾向に気づき、【自身を振り返ることができる】、【的確に評価できる】ことに繋がり、客観的に自己評価ができていたと考える。その過程で、学生は成長を自覚しながら、【自身の達成状況が理解できる】は、思考力を深めるクリティカル・シンキングの訓練になっていたことを示す。また、展開が早い急性期実習で、実習目標を理解した上で実習に取り組めることで【的確に評価できる】ことは、評価基準が明確化されていることで評価の客観性が確保される¹²⁾というルーブリックによる効果といえる。

最後に、実習評価指針で気づいた点として、「どこに自分が当てはまるのか分かりにくいものがあった」、「点数がつけにくい個所があった」という記述から、表現を見直す必要性が示唆された。さらに、「実習前や中にもう少し意識して使うような説明があれば、もう少し有効活用できたかもしれない」という記述から、実習評価指針の説明方法や時期についても改善する必要性が示唆された。

Ⅵ. 結 論

- ① 回答した学生の、95.5%は、実習評価指針を活用していた。
- ② 実習評価指針を用いることで、「実習目標の理解に繋がる」、「中間評価の際に実習後半の課題を見出せる」、「客観的な評価ができる」という有用性が明らかになった。

Ⅶ. 本研究の限界と今後の課題

本研究の分析対象は21名であり、結果は急性実習生の実態を反映しているとはいえず、一般化には限界がある。しかし、実習評価指針の表現や説明方法等の改善に関する示唆を得たため、効果的な実習に向けて今後も継続して取り組みたい。

謝辞

本研究にご協力くださいました学生の皆様に心から感謝申し上げます。

〔文献〕

- 1) 文部科学省 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申), 2012.
<http://www.kodaikyo.org/?p=743> (2019/8/28 アクセス)
- 2) 文部科学省：大学設置基準
http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/kitei/reiki_honbun/w002RG00000949.html
(2019/8/28 アクセス)
- 3) 北川明：看護学実習に役立つループリック 作成法と実用例, 日総研, 2018, 21.
- 4) 生田宴里, 荒川千歳, 他5名：本学の成人クリティカル実習における教育的介入の手がかりについての検討 - ループリックを用いた学生と教員の評価の分析から -, 人間看護学研究, 14: 47-52, 2016.
- 5) 岩井信彦, 大久保吏司, 他2名：臨床実習科目の成績評価 - ループリック評価の導入 -, 理学療法学, 33 (2): 365 - 371, 2018.
- 6) 田島桂子：看護学教育評価の基礎と実際 看護実践能力の育成の充実に向けて, 医学書院, 2016, 119.
- 7) 安酸史子編集：経験型実習教育 看護師をはぐくむ理論と実践, 医学書院, 2015, 79 - 80.
- 8) 前掲3), 12.
- 9) 森田繁子, 上田伊佐子：看護教育に活かすループリック評価 実践ガイド, メジカルフレンド社, 2018, 11-12.
- 10) 森田繁子：看護教育とループリック評価, 看護展望, 42 (1): 74-79, 2017.
- 11) 森田繁子：ループリックを活用した迅速なフィードバックと形成的評価, 看護展望, 42 (13): 80 - 85, 2017.
- 12) 前掲9)

(もりやす ともこ 看護学科)

(ちょう すうらい 看護学科)

(りき さきこ 看護学科)

2019年9月20日受理

成人看護学実習Ⅰ（急性期） 実習評価の指針

達成度	4 十分できた (タイムリーにできた)	3 ほとんどできた	2 少しできた	1 ほとんどできなかった
Ⅰ. 手術が患者・家族に及ぼす身体・心理・社会的影響を理解する				
1) 手術治療適応となる病態を理解する	手術後の病態についても説明できる	病態と手術適応について説明できる	症状と病態について説明できる	疾患の一般的な症状・検査・治療について説明できない
2) 患者に個別の看護問題を抽出し、根拠を説明できる	現病歴・既往歴、心理・社会的背景を踏まえた個別性ある看護問題を抽出し、その根拠を説明できる	現病歴・既往歴を踏まえた看護問題を抽出し、その根拠を説明できる	手術・麻酔侵襲から予測される一般的な看護問題を抽出できる	一般的な看護問題を抽出できない
3) 患者の状態に応じて看護問題の優先順位を見直すことができる	患者の状態に応じて再アセスメントし、看護問題の優先順位とその根拠を説明できる	患者の状態に応じて再アセスメントし、看護問題の優先順位を見直すことができる	患者の状態に応じて再アセスメントし、看護問題を明確にできる	患者の状態に応じて看護問題の優先順位を見直すことができない
Ⅱ. 手術前・手術中・手術後の各期に応じた看護を理解する				
1) 手術前：全身状態を整え、術後のリスクを予測することができる				
・ 全身状態をアセスメントし、手術のリスクを予測することができる	患者が術後合併症を発生する機序を説明できる	手術のリスク因子について説明できる	全身状態を基準値と比較できる	全身状態のアセスメントに必要な情報収集ができない
・ 患者や家族の手術に対する思いに寄り添った援助ができる	患者・家族の思いに共感し、寄り添った援助ができる	患者・家族の手術に対する思いをアセスメントし、援助を説明できる	患者・家族の手術に対する思いを知ることができるが、アセスメントできない	一般的な患者・家族の手術に対する思いについて説明出来ない
・ 手術後合併症を予防するための援助ができる	患者の手術後合併症を予防するための援助を実践できる	患者の手術後合併症を予防するための援助について説明できる	一般的な手術後合併症の予防について説明できる	一般的な手術後合併症のリスクを説明できない
・ 術式に応じた術前処置の必要性を説明できる	患者の状態に応じた術前処置の必要性を理解し患者に説明できる	患者の状態に合わせた術前処置の必要性について説明できる	術式に応じた術前処置について説明できる	術式に応じた一般的な術前処置について説明できない
2) 手術中：手術を体感し、手術侵襲を理解できる				
・ 病棟と手術室の継続看護について説明できる	病棟と手術室の申し送り内容を活かした手術中・手術後看護について説明できる	病棟と手術室の申し送り内容について、個別性を説明できる	病棟と手術室の一般的な申し送り内容について説明できる	病棟と手術室の申し送りの必要性について説明できない
・ 手術室の直接・間接介助看護師、他職種連携の協同について説明できる	患者の手術における他職種連携について、各職種の役割と協同について説明できる	患者の手術における他職種連携の職種が言える	一般的な直接・間接看護師の協同について説明できる	一般的な直接・間接介助看護師の役割について説明できない
・ 麻酔の導入・覚醒時の観察とその必要性を説明できる	患者の麻酔導入・覚醒時の観察とその必要性について説明できる	患者の麻酔導入・覚醒時の観察項目が言える	一般的な麻酔導入・覚醒時の観察項目について説明できる	一般的な麻酔導入～抜管迄の流れについて説明できない
・ 手術前後の器質的・機能的変化、術後診断（確定診断）を説明できる	手術後の確定診断について説明できる	手術前後の機能的変化について説明できる	手術前後の器質的変化について説明できる	手術部位の解剖生理について説明出来ない
・ 手術見学を通して手術を受ける患者の思いに共感できる	手術に対する患者の思いに共感し、患者と共有できる	患者の手術に対する思いを受け止めることができる	患者の手術に対する思いを知ることができる	一般的な手術に対する患者の思いについて説明できない
3) 手術後：回復過程に応じた援助ができる				
・ 手術後急性期の全身状態の観察とその必要性を説明できる	手術後急性期に必要な個別性の観察とその根拠について説明できる	手術後急性期に必要な個別性の観察について説明できる	手術後急性期に必要な一般的な観察項目について説明できる	手術後急性期に必要な、一般的な観察項目について説明できない
・ 術後合併症の発生機序を理解し、観察・アセスメントができる	術後合併症のリスクアセスメントができ、予防・早期発見のための観察ができる	術後合併症の発生機序について説明できる	一般的な術後合併症について説明できる	一般的な術後合併症について説明できない
・ 安全・安楽な早期離床への援助ができる	安全・安楽な早期離床への援助ができる	患者の早期離床を進める方法について説明できる	患者の早期離床の意義について説明できる	早期離床の一般的な意義について説明できない
・ ボディイメージ変容への援助ができる	手術後のボディイメージ受容への援助について説明できる	患者が手術後のボディイメージについてどう感じているか説明できる	手術が患者のボディイメージに影響することについて説明できる	手術後の一般的なボディイメージ変容について説明できない
・ 退院後の生活再構築に向けての援助ができる	適切な退院指導の内容について説明できる	退院後の生活変容の理由について説明できる	手術前と退院後の生活の違いについて説明できる	術式に応じた一般的な退院指導の内容について説明できない
Ⅲ. 侵襲下にある患者の尊厳を重んじる態度、医療チームの一員としての誠実で謙虚な態度、自己研鑽し続ける態度を身に着けることができる				
・ 主体的・積極的に実習に取り組む、目的的行動を実践することができる	自己の実習目標達成に向けて目的的行動を心掛け、主体的・積極的に取り組んでいる	主体的・積極的に取り組んでいる	実習に取り組んでいるが、時に受け身になる	自己の実習目標が明確ではない
・ 自分の看護を日々振り返り、より良い看護を追求することができる	自分の看護を日々振り返り、自ら課題を見出しながら、助言やカンファレンスでの学びを実践に活かすことができる	自分の看護を日々振り返り、助言やカンファレンスでの学びを実践に活かすことができる	自分の看護を日々振り返っているが、時に行動が伴わないことがある	日々実習の振り返りができない
・ チームの一員として責任ある行動をとり、報告・連絡・相談を適切に行うことができる	患者サポートチームの一員としての自覚を持ち、必要時、報告・連絡・相談ができる	患者サポートチームの一員としての自覚を持ち、学生としての役割をグループ全員が果たせるように行動できる	実習グループの一員として自覚し、グループ内での役割を果たすことができる	実習グループの一員としての自覚が不十分で、責任ある行動がとれないことがある

成人看護学実習Ⅰ（急性期）
「実習評価の指針」に関する質問紙

成人看護学実習Ⅰ（急性期）で用いた「実習評価の指針」について、いくつかの質問にお答え下さい。

各質問について、当てはまるものを○で囲み理由をお書き下さい。

なるべく空白がないようにお書き下さい。

1. 実習中「実習評価の指針」を活用しましたか？

- ・活用した
- ・活用しなかった

【どのように活用しましたか？】

【活用しなかった理由をお書き下さい】

2. 「実習評価の指針」を用いることで、実習目標の理解につながりましたか？

- ・つながった
- ・つながらなかった

【理由をお書き下さい】

3. 「実習評価の指針」を用いることで、中間評価の際に実習後半の課題を見出せましたか？

- ・見出せた
- ・見出せなかった

【理由をお書き下さい】

4. 「実習評価の指針」を用いることで、客観的な自己評価ができましたか？

- ・できた
- ・できなかった

【理由をお書き下さい】

5. 「実習評価の指針」の内容に関して、お気づきの点があれば何でもお書きください。

【自由にお書きください】

ご協力ありがとうございました